

シルバー ところざわ

◆発行 社団 法人 所沢市シルバー人材センター 1995 No.50



3月号

“華やかに” 会員作品展//



第一列目展示の作品と鑑賞される市民の方々
の大作揃い。これぞシルバー人材センター会員の作品展と言えるもので、連日多くの一般市民の方々、
並びに会員の方々が鑑賞に訪れ、好評裡に終了することができました。

この作品展は会員皆様の趣味による作品の展示を通じ、センター活動の一般市民の方々に対する P.
R.と、会員相互の交流を深める意義深いものですが、その主旨を充分に活かすことができた内容のも
のでした。

出品頂きました会員の方々に厚く御礼申し上げますと共に、次回も又、より多くの会員皆さんのご協
力を頂き、盛大に開催されることを願う次第です。

会員作品展が本年も多数会員皆様のご協力を得て、
1月23日～25日の3日間にわたり、新年初頭のイベ
ントに相応しく、華やかに開催されました。

今年が2回目となります。本年は会員46名の方々
から、書、掛軸、油絵、水墨画、日本画、ちぎり絵、
その他陶器、人形、刺しゅう、編み物、折紙などの
手芸品、盆栽等、合計136点と多数の出品を頂き盛
大な会員作品展となりました。

作品はそれぞれ素晴らしい、プロ顔負けとも言える
出来で、連日多くの一般市民の方々、並びに会員の方々が鑑賞に訪れ、好評裡に終了することができました。



第二列目に展示された作品の数々

未就業会員の皆様へ

理事長 高橋 義男

シルバー人材センターは、自主・自立・共働・共助の精神をもって、会員自らの経験と能力を発揮することにより、生き甲斐を感じあわせて社会貢献に資することができます。そうして、その結果は、大きな社会的評価を受け、さればこそ政府も所要とする財政的裏付けを実施することによって、われわれの国家的寄与に期待を寄せているわけであります。

シルバー人材センターは、その前身、高齢者事業団が昭和四十年代後半から五十年代にかけ、東京都において、時の美濃部都知事が発案、そのプレーンとしての大河内東大教授（後の総長）ほか有識者の協力で、東京都江戸川区をモデル実施団体として発足、一、二年にして東京都各区、続いて周辺都市に拡がり、更にここ二十年足らずのうちに全国津々浦々に普及設立されました。

今日では昭和五十七年の法制化と共に、加盟六百七十団体、三十二万人の組織現況を示すに至り、その事業実績（つまり年寄りの稼ぎ高）は一千百億円に達しました。

わが国G N Pの一翼を担うと申しても過言ではなく、正にシルバーパワーの爆発というふざわしい発展であります。

今や少子高齢社会の到来が声高に論じられておりますが、この老人パワーを無視しては諸般の社会的営為が成り立ちがたいと言えましょう。

未曾有の敗戦と廃墟の中から立ち上がったのも、われわれ戦前・戦中派を含む、今は高齢者といわれる層であります。

敗戦直後の形振りかまわぬ奮闘努力が、今日の世界に冠たる経済大国を生み且つ育てるエネルギーであった事は疑いをいれません。多かれ少なかれお互いの思い出・記憶の中に、その凄まじい姿があるに違いないと思います。

ある時は既存、本来のモラルやルールを考えたり従ったりはできないで突っ走らねばならぬことも、あるいはあったかも知れません。日本古来の義理を欠き、人情をかえりみるいとまのなかったこともあったかも知れません。

それにしてもほとばしり出るようなエネルギーであった事に間違いありません。それをそのまま今日にあてはめる訳にはいかないでしょうが、とにかく今日あるべき基礎がおかれたのです。

こうした幾変遷を経て、シルバー人材センターに結集した仲間の人達のうちから幾人かの人々が貴重な体験を月刊「シルバー人材センター」新年号に発表しております。

老いて益々盛んなりというべきか、勤勉なる日本民族群像と申すべきか、吾々のもって範とするに足るこの人達の、活動報告をぜひ参考にされたいと思います。

リプリントを用意しておりますから、事務局に御請求下さい。差し上げますので御参考にしていただきたいと存じます。

阪神・淡路大震災被災者へ、善意の義援金!!

平成7年1月17日（火）午前5時46分、神戸市地区、淡路島を震源地とし、兵庫県南部一帯を襲った直下型阪神・淡路大震災は、一瞬にして、死者5,450人余、負傷者2万数千人、損・倒壊家屋10万数千戸と、全く想像を絶する悲惨な結果となりました。

二ヶ月近い日を経過した現在、未だ住居を失い、家族を失い、財産を失い、傷つき、仮設の避難所で厳しい不自由な避難生活を余儀なくされている方は20万人に近いという。

当センターでは、災害発生即日、事務所カウンターに義援金募金箱を設置、募金に当たる。早速に多数会員、並びに役員職員の方々から1月25日までに合計38,570円の善意の義援金が寄せられ、1月26日、全国シルバー人材センター協会を経て被災者救済機関へ送金することができました。ご協力ありがとうございました。

被災された方々の一日も早い立ち直りと、被災地の一日も早い復興を心からご祈念申し上げる次第です。

“文化講演会” 盛況裡に!!

高橋理事長、就業率向上を訴えられる



開会の辞を述べる伊藤事業部会長

確立するに至った経緯と現況。更に当所沢市シルバー人材センターが昭和53年、埼玉県下のトップを切って名譽あるスタートを果たし、現在も有数の事業実績を保っている。然し誇れない問題点がある。それは、「会員の就業率が現在県下でも最低の状態にあることである」と訴えられた。そしてその就業率の向上を期するための諸施策を年度内に策定、新年度はその課題克服を最大の目標に取り組む。会員各位の一層の協力、特に未就業会員の方々も就業内容にとらわれず積極的に就業に参加され、名実共に県下一のセンターとなるよう向上に寄与されたい、と要請された。終わって越坂部三郎先生の講演会に入る。

越坂部先生は現在所沢市社会教育委員として、広く所沢市の伝統文化の発掘と伝承に関与貢献されて居られ、ために講話の内容は多様、話術は誠に洒脱。当日は「所沢の食文化について」を主題としての講話を頂きましたが、笑いと感動に満ち意義深いものでした。

所沢名物“焼きだんご”的由来と商品価値。たかが“だんご”と思っていたが、名物と言われるものは流石、計り知れない程の味に対する深い吟味と、極めて高い科学的とも言える程の配慮が払われ、売られていたことに驚かされた。だんごが何故4個なのか、4個のうち真ん中の2個は何故小さいのか、串はどうして四角で竹製なのか、どうして経木と新聞紙に包んで売られたのか。

その他、今は幻ともなった名品“湖月ちぢみ”という高い技術から織り出された高価な織物が所沢で生産されていたこと。また所沢地方古来の家族形成、子供の躰、風習、習慣など、今は考えられないような強い絆で家族が結ばれていたことなど、何れも興味深いものでした。

終了後、多くの会員の方々から、所沢にこんな素晴らしい隠れた文化があったとは知らなかった、との感嘆の声が聞かれました。

日頃疎遠の会員の方々が一堂に会し、所沢の思わぬ隠れ文化を耳にし、目に触れ、心の和と交流を深めると共に、新たな郷土愛と誇りさえ感じさせてくれた味わい深い講演会でした。

「所沢の文化を聞こう」と題する、事業部会主催による講演会が2月6日（月）午後1時30分から、旧市役所庁舎4階会議室に於いて開催された。

当日会場は、総会時以外には考えられない百数十名の会員が会場を埋め尽くした。

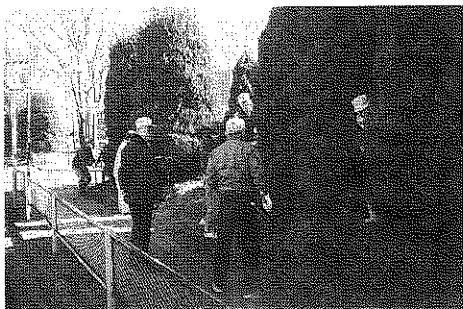
山川次長の司会で開会、前段高橋理事長の挨拶と訓話。理事長からは、昭和50年東京都江戸川区で呱々の声を上げたシルバー人材センターの前身高齢者事業団が、今日全国的組織に拡大権要な社会的地位を



客席に入り講話される越坂部三郎先生

プロを目指して……

植木職技術研修に新人11名参加



当センター主要受託事業の一つ、植木の剪定業務は、現植木職会員の高技術と低廉さが評価され、景気低迷により受託業務の減少が懸念される中、唯一需要増が見込まれる事業。

事業部会では、新年度の課題である会員の就業率向上、並びに事業収入確保の一環として、植木剪定業務の受注拡大を計画、過般植木職希望者を広く募ったところ、早々に予想を上回る11名の応募があった。

そこで去る2月20日～23日の3日間にわたって、植木職先輩会員飯岡茂雄氏を講師に、市民医療センター及び東部清掃工場の植木手入れを生の教材に技術の実地研修が行なわれました。

高橋理事長始め大野専務、山川次長、係員が連日研修会場に出向き、技術の一日も早い習得を期待し激励されました。

受講者全員の一日も早い、プロとしての就労が望まれる次第です。



小原さんを偲んで

吾妻地区 細 谷 利

私より5歳年上の小原さん。小原さんの自家用車に同乗させてもらい就業現場まで行き、作業したことがまだ昨日のことのように思い出され、あの温厚な顔が目の前にありありと浮かびます。訃報に接し自宅を訪れたとき玄関で涙が止めどなく溢れてくれました。こんなに突然になぜ、この忙しい暮だというのに。

シルバー人材センターに入会する以前は同じ会社に30年以上勤め、私より5年早く退職されました。在職中の職場は隣りの棟で働き、仕事の関係上私が無理なことを頼んでも嫌な顔一つせず手伝ってくれ、私を助けてくれました。会社での仕事は、私は機械の組み立て、小原さんは板金課で電気溶接でした。

私がシルバー人材センターに入会すると、そこでまた小原さんと一緒にになりました。お互いに除草作業を主にした仕事ですので、又一緒に働くこととなりました。小原さんは車に大きなタンクを積んで、除草剤の散布を一人でやってくれました。航空公園、医療センター、看護学院、水道部浄水場など、年に何回もの除草の際には、使用する道具の運搬もしてくれました。全くよく働き、よく協力してくれました。小原さんはミニ盆栽も上手でした。また夏の日長の時はシルバーの仕事の前、そして帰宅後、自宅前の畑で野菜も作って居られました。私が朝のジョギングの帰りによく畑に立ち寄り雑談し、帰るときには野菜を持たせてくれました。本当にありがとうございました。79歳でこの世の別れとは、余りに世は非情です。忙しい師走に旅立たれた小原さん、浄土の旅を一步一步踏みしめて下さい。あの世の春も間近です。浄土でも立派な花が咲くと思います。ご冥福をお祈りいたします。

小原さんとは、会社、シルバーを通じて40余年と半世紀近いお付き合いでしたが、何故か定年後シルバーで共に働き、語らった日々が、より多く小原さんの深い人間性に触れた思いがいたします。あの温和な眼差しでシルバーの益々の発展を見守ってくれることでしょう。小原さんのご遺志に背かぬよう頑張りたいと思います。

私の終戦秘話

小手指地区 長野瑞穂

今年は、あの忌わしい第二次世界大戦（大東亜戦争とも言った）が終結を見た日の昭和20年8月15日から半世紀50年の節目の年となる。

私は、昭和18年12月8日、その世界大戦に突入する以前の昭和16年4月から終戦翌年の昭和21年7月、内地に引き揚げるまで商社の支店勤務と軍の現地召集を受けタイ国のバンコク市に5ヶ月余在留した。その間、泰緬鉄道建設工事の初期に約6ヶ月間現地日本人会から、陸軍の臨時通訳（タイ語兼英語）として軍に派遣された外、幾つもの忘れ得ない体験がある。その中で終戦を迎える直前の昭和20年6月、二回目の現地召集でタイ国駐留の第18方面軍の兵站司令部に勤務、8月15日終戦を迎えた日の翌日、未だに信じられないような幻の現地人との出逢いにより、今日“生”を維持し平和を享受し得られた事となった私の終戦秘話をお届けしたい。

大戦終結の8月15日、現地召集者は即日召集解除となりました。然し現地召集の私達13名は部隊へのお礼として除隊の一日前を申し出て、その晩、衛兵勤務を担当、翌16日の午後一切の手続きを済ませて除隊となりました。除隊の際、兵籍簿と新品の軍服を渡され、その他欲しいものは何なりと持って行け、と言われた。然し在留邦人に戻るには妨げになると思い、兵籍簿は焼却し、他はすべて返却して着のみ着のままで営門を出た。辺りは既に夕闇となっていた。

営門を出て歩き始めましたが、市の中心部に近い国立競技場から、サートン路南東の居留場所至誠寮（商社の独身寮）までは4キロ以上あり、物情騒然の街を歩くのは危険と思い、サムロー（輪タク）を拾うべく手を上げた。然し近寄って来て日本人と判ると皆、首を振って乗車拒否。その中、華泰ハーフの屈強な男が乗せてくれるという。一瞬危険を感じ、ためらったが街中を歩くよりはました、と思い直し乗ることとした。暫く大通りを走っていたが近道をすると言って、街灯もない裏道に入って行く。やがて川端柳が両側に生い繁り人通りもない所まで来るとハタと車を止めた。これは殺される覚悟、然し素手でも最後まで抵抗しようと身構えた。すると男は意外にも一礼して握手を求めて来た。そして「勘違いしないで貰いたい。私は是非日本人に話したいと思っていた事がある。人目につく所ではまずいのでここへ案内したのだ。」と言う。そして「私は中国人の血が入っているから、日本を敵と思う心に変わりはない。然し蒋介石総統の“仇に恩で報ゆる度量で接しろ”という指示には私も同感だ。色々あったが負けたからといって小さくなることはない。これから東洋人はみんな仲良くし、手を握り合おう。日本へ帰ったら苦しい日々が続くだろうが頑張って復興に努めて貰いたい。」とタイ語で語ってくれた。寮まで送ってもらい代金を払おうとすると、「私のささやかな気持ちだから」と言って受け取ってくれなかった。殺される、と思ったのが逆に励まされる結果となった。

この一件は誰も信じてくれまいと思い、最近まで一切口外しなかったが、戦後50年、特にマレーシアのマハティール首相の発言などが出る新しい時代の変化に応じて、茲で実話を記録に残す意味で書いた次第です。それにしても、この人物の正体は何だったのだろうか。

当時、中国から多くの特殊工作員が現地に潜入、例の辻参謀が僧形に姿を変え、バンコク市内の日本人寺に潜伏、英軍の厳しい戦犯としての追跡を逃れ、重慶までの潜行三千里（辻参謀著書）を手引きしてくれたのが、蒋介石直系の工作機関『藍衣社』の工作員だったと書かれている。今にして思えば、あのサムロー車夫も、その特殊工作員の一人であったのかも知れない。

然し、何れの人物であったにしろ、あの終戦直後の混とんの中で、民族を越え、恩仇を越え、日本の復興を願い励まし、救ってくれたサムローの言動を、——単なる秘話としてではなく未だ心の友とし信じている。

“石楠花”咲く奥秩父山行

—平成6年6月6日～8日—

中央地区 秋 山 修

シルバー会員のN君とは同じ仕事仲間。偶々、二人とも山が趣味という事で、奥秩父の十文字峠、甲武信岳に登り石楠花を愛でようということになった。N君は年に三、四回各地の登山に挑むというベテラン。私は年一回位、ハイキングを楽しむ程度で体力的に自信はなかったが、山に登りたい気持ちを抑え切れず同行させてもらう事とした。

新宿から中央線で小淵沢へ、そこから日本一の高地鉄道小海線に乗る。関西からの団体客の老婦人は、車窓から望める八ヶ岳に「ええですなあ」とその絶景に目を細める。爽やかな空気は関西の湿ったものと大分違うと言う。信濃川上駅で下車、バスに乗ること三十分、降りて登山道に入る。道の両側にはビニールを敵に被せた高原野菜の苗が植えられ、畑仕事に勤しむ農夫の姿が牧歌的。何よりも都会の蒸し暑い空気と違ひ肌の汗も気にならない。やがてモウキ平の原生林に入る。足元には鈴蘭に似た形で、色はピンク色の可憐な「ベニ花—薬草」の花が白樺唐松林の下に奥深く続く。やがて登り連続、私は十五分程登っては休むという繰り返しでN君の足を引っ張ることしきり。原生林の中をジグザグとひたすら登り詰め、やっと「八丁坂の頭」。視界が一度に開け、それ迄の疲れが一気に消える。ここから今夜の宿舎「十文字小屋」迄は十五分程とのN君の話に急に元気が出る。十分程歩くと十文字峠の標識、左側の三国峠方面からの登山者が続々と登ってくる。右を見れば眼下に山小屋の屋根が見える。小屋の中はストーブが焚かれ、仄かに灯るランプが懐かしい。小屋から十分程で乙女の森と名付けられた石楠花の群生地がある。五百坪程の斜面に人の背丈より高く灌木化した石楠花が密生し見事な薄紅色の花をつけている。夕闇迫る静寂の中、誰に見せようとしているのだろう。小屋の七十歳を過ぎた内儀は、「今年のような事はあるもんじゃねえ」と語る。昨年の冷夏のことらしい。小屋のすぐ前5米位離れた切株にリスが出没、愛らしい姿で餌を食べる。女性登山客の一人が「ここのかレーは美味しいのよ」と語る。夕食後、主人の幻燈写真で「ロードショウ」が始まる。見事な映写に五十名余の宿泊客から拍手と感嘆の声が上がる。六時頃からガスが一面立ちこめ、窓の外は全く視界が利かない。早めに布団に入り、明日に備える。翌朝六時に朝食に行くと我々は最後の方で、すでに支度をしたり出発した登山客の方が多い。昨夜ガスが小雨に変わったが、今朝は上がっている。小屋からの大山コースに残雪を見る。昨夜の温度がうなづける。登り始めるとすぐ息苦しくなり、十五分位で小休止。N君は煙草を吸わないので、それ程でもない様子。一時間半程で大山着。この辺に来ると、石楠花が少ない。長い登りを終えて十一時頃、やっと三宝山に到着。カップラーメンと握り飯で昼食。オレンジ、グレープがいやに旨い。ここ迄背負って来た甲斐があったとつくづく思う。記憶を辿ると、こんな山頂での昼食は七、八年振りぐらいだろうか。天気は暑からず寒からずで爽快。爽やかな風が汗ばんだ肌を撫でて行く。一時間程休んで縦走に入る。登り下りを繰り返し、甲武信岳頂上に十二時半着。頂上間近の登りは、距離は短いがきつかった。

約四十年振りの甲武信岳は亡き弟との縦走を思い出させ、昔と変わらない姿で迎えてくれた。今日はガスが濃くN君はしきりに富士の姿を探す。徐々に晴れて来ると間近に国師ケ岳など雄大な山々が目を楽しませてくれる。二時間程その絶景を堪能、樹海を十五分程下ると甲武信小屋に着く。管理人に聞いて荒川源流方向へ道をとり二十分程東側に下ると、石の標示塔があり、荒川源流と彫られている。谷間に幅四、五十畳程の小川が流れている。生まれたての水を飲む。小屋はソーラーパネル利用で小さな電灯が灯り、ぼんやりと人の顔が見分けられる程度。夕食後、翌日の天気が気掛かりで外に出てみると驚く。満天の星一つが大きく輝き威圧感さえ感じる。翌八日四時に目覚め、窓の外を見る。日の出が近いのか、地平線がオレンジ色。これなら日の出に映える富士山が見えるのでは?とカメラを手に高台に急ぐ。同宿の人達も御来光を見ようと寒氣の中に立つ。西の方を見れば、墨絵の様な富士が明けやらぬ空に浮かぶ。正に幽玄そのもの。朝食を終え六時出発。隣に寝ていた七十二歳という男性は、ベテランらしく起床も支度も、歩くのも早く忽ち先の方に姿を消す。

小屋を出ると樹海下の残雪を踏む。一時間程登るとあとは小さな登り下りで楽になる。木賊山を過ぎ戸渡分岐点。この辺では石楠花が所々に咲き、三葉つづじがオレンジ色の花を満開にして見せてくれる。新緑に映え疲れた我々に安らぎを与えるかの様に。戸渡尾根分岐点より眺望の良い徳ちゃん新道を下る。苔がビッシリと着いた直径一米程の倒木が所々で道を塞ぐが踏み越えながらどんどん下る。やがて沢の流れの音が聞こえてくる。麓が近いのを感じさせ、今回の山行も終わりに近づいたのを知る。西沢小屋に十時半到着、笛吹川の水で食事を作り西沢渓谷を廻ることにする。川の流れは青く澄み鎖場などを経て渓谷終点間近かの五段の滝は庄巻。帰途塩山駅より十五分程の温泉に浸かり疲れを癒す。湯上がりに飲むビールの旨さは格別である。家族の待つ我が家への到着は午後九時頃となる。標高二五〇〇メートル級の山でも日程に余裕を取ればまだ充分登れる、と自信を取り戻すと共に、N君とも一層友情を深め、若き日の亡弟を思い起こすなど石楠花を愛する以外に収穫の多い山行であった。

「職員県外研修」に参加して!!

業務係 新井 靖弘

会員の皆様は、あまりご存知ないかもしれません、年に一度、埼玉県内の各シルバー人材センター職員と一緒に県外のシルバー人材センターを訪問、同センターの活動状況、特殊事業の内容研修など見聞を広めるための「職員県外研修」というのがございます。今年は、滋賀県の守山市シルバー人材センター訪問で実施され参加させて頂きました。

東京から新幹線でおよそ2時間、米原駅で降り、あとはバスで守山市まで。研修会では、守山市シルバー人材センターの事務局長から同センターの事業概要の説明を頂き、あと質疑方式により種々貴重な意見の交換や、参考事項、特殊事項の質問、確認などを行ない滞りなく有意義に研修会を終えました。後はホテルへ行き、夜は懇親会で交流と懇親を深め初日を終了しました。

二日目は、建都1200年記念行事で賑わう京都を少し見学して帰るというスケジュールでした。

次の日、寒い寒いと思いホテルを出ると、外は思いも寄らなかった雪に見舞われました。

雪景色となった三井寺（大津）で先ず最初の記念撮影、そしてバスで次の無隣庵へ。無隣庵は、実はあの山県有朋の別荘で庭園も自身で手掛け、造成されたとは全く知りませんでした。この人は造園の趣味があつたらしく、他にも自分が手掛けた庭園が幾つもあるそうです（有名な東京目白の椿山荘もその一つだそうです）。85歳で他界されたそうですが、内閣総理大臣までなさった方が、もし今生存されシルバーの会員だったら、腕のよい植木職人になって居られたのでは……と、彼の肖像画を見ながら職掌柄勝手な想像をしてしまいました。そこから歩いて5分位の所に南禅寺があります。観光客も少なく、辺りは静寂そのもの。南禅寺の中に入って廊下を歩いて行くと、ふと突き当たりの壁に墨汁でこう書いてありました。「よく自分に問うてみて下さい。一度きりの人生を、どう生きるか」と。悔いのない人生を歩みなさい……、と呼びかけられた想いでした。実はこの南禅寺を後にする頃から雪が一段と強く降ってきて、見学どころではなくなってしまったので早目にバスに引き上げ、次の見学場所の清水寺へと急いだのでした。

平日ということもあって、産寧坂は空いていました。この坂を登った所に清水寺はあります。修学旅行生もチラホラ、といったところで、夏とは違はずっと静かでした。雪景色の清水寺なんて絵葉書でも見た記憶がないので写真でも撮っておけばよかったと、後でつくづく残念に思いました。

思いも寄らない雪に見舞われる中、見学も終わり、一路京都駅へ。それから約3時間新幹線に乗り、東京駅へ帰着、そこで解散となりました。

今回県外研修で勉強してきたこと、見聞したことと今後日常業務に反映させ、会員の皆様が「所沢市シルバー人材センター」で少しでも働き易くなるように努力し、役立てて行きたいと思います。

日頃会員皆様のご協力に対しまして感謝申し上げ、今回研修参加のご報告とさせて頂きます。

◎皆さんの努力結果

月	会員数	受託件数	就業人員		契約金額			
			実人員	延人員	配分金	事務費	その他	計
10	800	159	345	5,446	21,726,768	1,282,309	824,449	23,833,526
11	811	205	358	5,611	24,097,729	1,565,518	971,436	26,634,683
12	809	192	361	5,619	22,932,484	1,350,797	593,776	24,877,057
合計		556		16,676	68,756,981	4,198,624	2,389,661	75,345,266



—婦人部主催— 日帰りバス旅行//

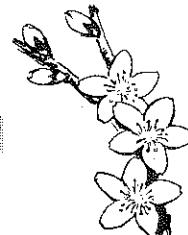
婦人部では、次により、恒例、春の日帰りバス旅行を実施いたします。
先着35名で締切らせて頂きます。お早目にお申込み下さい。

1. 日時：平成7年5月11日（木）
2. 行先：下久保ダム方面（金鑽神社、元三大師など見学）
3. 集合場所及び時間：旧市役所東口玄関前、午前8時20分集合
4. 会費：3,000円
5. 申込締切日：平成7年4月20日（木）

—平成7年度 定期総会開催日程決まる//—

平成7年度定期総会を次により開催いたします。多数会員皆さん、万障縕合わせご出席下さいます
ようお願いいたします。

1. 日時：平成7年5月26日（金）午後1時より
 2. 場所：旧市役所庁舎 4階市民ホール
- ※総会終了後、懇親パーティを行ないます。



—会員、役員、職員合同清掃奉仕作業に参加を//—

1. 日 時：3月25日（土）9:00から 雨天の場合翌26日（日）
2. 集合場所：所沢航空公園駅前広場
3. 清掃コース：航空公園駅前～市役所前～航空公園

※当日、弁当、清掃用具はセンターで用意します。多数会員さんの参加を希望します。特に、未就業会員さんの参加を歓迎します。

※準備の都合上、3月20日（月）までにセンター事務局へお申込み下さい。（電話可）

あとがき

平成7年新年の幕明け。どう受け止めたらよいのでしょうか。戦後50年という区切りの年。
その間、奇跡の高度成長と謳われた我が国経済もバブルと弾け、不況の渦中。その不況脱出へ淡い期待が持たれた矢先の1月17日午前5時46分。未曾有の大災害『阪神・淡路大震災』。警鐘なのか？ 試練なのか？ いずれにしても被災された方々にとって余りにも苛酷。一日も早い復興を願わざには居られません。

4月から新しい年度が始まる。当センターの最大課題は「会員就業率のアップ」。何がなんでも課題を達成して、名実共に県下第一のセンターへ。

本号が本年度最終号。幸い多数会員皆様のご寄稿、ご協力で内容も一步前進を見ることができました。ありがとうございました。新年度も一段のご協力を頂き、一層の充実を期したいと思います。次号は6月15日発行の予定、原稿は5月15日までにお寄せ下さい。（A. S）